多様な子供たちを包摂する「観」



見附市教育センター嘱託指導主事　多田　茂

今年の夏休み、甲子園の高校野球をテレビで見ていました。ある強豪校がタイムリーヒットなしで4点を奪って勝ち、「隙を作らず、隙を突くのがこのチーム」と言っていました。相手外野手が気を抜いて内野手にゆるく投げたのを見て、三塁ランナーが本塁を陥れた試合もありました。このチームのスローガンは「負けにくい野球」だそうです。

今年の夏の大会の予選からの参加校は 3,662 校で 3,363 チーム。このうち半分の 1680 チーム以上は、1 回試合をして夏が終わりました。優勝チームは予選からの 10 試合を負けることなく、3,363 チームの頂点に立ちました。相手に負けない、他者を上回ることを目指す勝負は「集団に準拠した評価」です。

今年の夏休み、北アルプスのある山を目指しました。約 30 年ぶりの再訪です。とても 30 年前と同じ速さでは登ることはできず、1.5 倍の時間をかけてゆっくり登りました。多くの人が追い抜いていきましたが、気になりません。気になるのは自分の体力と膝の調子で、自分のペースを守りながら歩き続けました。

そして、時間をかけてたどり着いた山頂では、30 年前と同じ眺望が広がり、同じ充実感がありました。老若男女様々な人が笑顔で周囲の山々を眺めていました。登る速度が速かろうが遅かろうが、みんなが山頂を目指し、頂上に立ったことを喜ぶのは「目標に準拠した評価」です。

平成 14 年の改訂学習指導要領の全面実施に伴い、「集団に準拠した評価」から「目標に準拠した評価」への転換が求められ、既に四半世紀が経過しようとしています。すべての児童生徒が学習指導要領に示す内容を確実に習得すること、すべての児童生徒が B 以上の評価になることを目指すとされたのですが、学校、特に高校入試や定期テスト、そして部活動の影響が強かった中学校では、学びにおける評価「観」が十分に変わるまでに多くの時間が必要だったようです。

今、次期学習指導要領改訂に向けて様々な情報が気になります。教育課程企画特別部会論点整理の第3章には「多様な子供たちを包摂する」というキーワードが出てきます。誰一人取り残さず、みんなを連れていくことが求められていて、その実現に向けては「目標に準拠した評価」の「観」が不可欠です。

一気に走って登ってもいい、休み休みゆっくりでもいい、対話を楽しみながらでもいい、荷物を持ってもらってもいい、途中の山小屋で体調を整えてもいい、ロープウエイを使ってもいい、様々なルートで誰もが自分らしく山頂にたどり着いて、素晴らしい眺望を堪能できる。

そんな多様性を認める柔軟な教育課程を実現している学校、一人一人の児童生徒がその個性や特性を生かして活躍する授業、みんなが自分のペースで目標に到達したことを一緒に喜べる教室など、「多様な子供たちを包摂する」環境が整えば、不登校もいじめも生まれにくいのではないかと期待しています。

（※教育課程企画特別部会論点整理に沿って「子供たち」と表記しています。）

Education Center Bulletin
2026.10.23
見附市教育センターだより
10月

学びの主人公を育てるプロの技 ―「信頼」を築く授業のテンポと緩急―

先日の学校訪問において、多くの学級の授業を参観する機会がありました。
その中で、ともすれば「お客様」になりがちなこどもたちを自然に巻き込み、誰もが学習の主人公として生き生きと取り組む素晴らしい授業に出会いました。プロの技によってこどもの学びが力強く前進していく様子は、大変印象的なものでした。

具体的には、課題への関心が薄く集中が続かなかったり、「自分が関与しなくても授業は進む」と感じていたりするこどもの存在を、教師が深く理解し、巧みにアプローチしていたのです。「あなたもそう思ったのね」とさりげなく声をかけたり、その子の近くへ歩み寄って別の子の意見を一緒に頷きながら聴いたりする姿が見られました。かといって無理に発言を強制するのではなく、必要に応じて「賛成か反対か」などの立場(帰属)を挙手等で問うことで、どの子も集団の中に確実に位置づけていました。わずか数分間の参観の中でも、教師と一人の児童とだけのやり取りに陥ることなく、学級全体として学びが活発に回り、動いていることを強く実感できたのです。

先生方におかれましては、この半年間、教育現場で激動の日々を過ごされたこととお察しいたします。4月からの「第1ロケット」を切り離し、より安定した軌道に乗るための「第2エンジン」へ点火する――現在はまさに、一年の折り返し地点です。
公開授業を参観する際は、表面的な「授業の流れ」だけでなく、「教師の教授行為」と「学習者の変容」の間にある因果関係に目を向けてみてください。「なぜこどもたちが自律的に動けるのか」という背後にある日常の働きかけや、学級文化(ヒドゥン・カリキュラム)を観察することで、自身の学びはより深まります。

■ 信頼の基盤をつくる「インストラクショナル・ペーシング」
こどもからの信頼と安心感は、すべての教育活動の基盤です。それは単なる「仲の良さ」ではなく、教員という専門職としての確かな指導力に裏打ちされたものです。今回はこの「信頼」を軸に、授業のテンポ(インストラクショナル・ペーシング)という視点から考えてみましょう。
インストラクショナル・ペーシングとは、指導の速度やリズム、活動を切り替えるテンポのことです。現代のこどもたちは、活動のない「空白の時間」に対する耐性が低い傾向にあるといわれています。授業中の不用意な「間」は集中力を削ぎ、逸脱行動を誘発する要因となります。ペーシングとは、単に早口で喋ることではなく、こどもの集中を持続させ、学習効果を最大化するための「時間のマネジメント技術」なのです。
ペーシングが重要な理由は大きく2点あります。 1つ目は、適切なペースで情報や課題が提示されることで、こどもが退屈せずに授業へ没頭できる点です。 2つ目は、スムーズな進行によって授業の「隙」をなくし、逸脱行動を予防して学級経営を安定させる点です。

■ 重要なのは速さではなく「メリハリ」
ペーシングの本質は、指示や切り替えはテキパキ行い、思考する時間はじっくり確保するという「緩急のコントロール」にあります。具体的には、次の3つの視点がポイントとなります。

1. 切り替え(トランジション)の短縮
指示や準備のダラダラ感をなくし、授業全体の熱量とテンポを維持します。

2. 情報のスモールステップ化
説明を短く区切り、こどもが活動・発言する頻度を増やすことで認知的負荷を下げます。

3. 適切なウェイトタイム(待つ時間)の確保
効率を求めるあまり、こどもの思考の時間まで奪ってはいけません。質問後に指名するまで「3秒以上待つ」ことや、発言後の静寂は、こどもの思考を深め、教師が理解度を把握するために不可欠な時間です。
意識するコツは、「速く話す」ことではなく「無駄を省く」ことです。「えーっと」などの不要語や、教材準備の不足などによるタイムロスを削ることが、密度の高いテンポを生み出します。作業はリズムよく進め、問いに対する思考の時間はしっかりと確保するメリハリを大切にしましょう。

若手の先生方が先輩の授業を「上手い」と感じる背景には、こうした緻密なペーシング技術が存在しています。そして、その技術の根底にあるのは「目の前のこどもをどう育てるか」という温かい情熱です。
焦る必要はまったくありません。日々の振り返りと工夫を重ねることで、皆さんは確実に一歩ずつプロとしての歩みを進めています。この折り返し地点から、こどもたちとともに深まる実りの秋にしていきましょう。

次期学習指導要領を読み解く「四輪駆動(四駆)」という視点

令和８年８月、文部科学省の教育課程企画特別部会より「次期学習指導要領等に向けた審議まとめ(素案)」が公表されました。その膨大な文章には、「自らの人生を舵取りする力の育成」をはじめ、「統合的な理解と総合的な発揮」「内化と外化の往還」「1階と2階の柔軟化」「テーマ探究とマイ探究」「学習枠・研究研修等枠」など、これからの教育を照らす重要なキー概念が網の目のように張り巡らされています。

ただし、ここでひとつ心にとどめておきたいのは、これが「素案」という検討段階の文書である点です。前回の改訂時、「アクティブ・ラーニング」という言葉が世間で大きな話題となりました。しかし、最終的な学習指導要領の本文にはその言葉は使われませんでした。手や体を動かすような「見た目の活発な活動」という誤解(ミスリード)を避け、本質的にアクティブになるべきなのは「こどもの頭の中(思考)」であるというメッセージを込めて、「主体的・対話的で深い学び」へと昇華された経緯があります。今回の素案に並ぶ様々な文言も、今後の議論の中でさらに精査され、表現が変わっていく可能性が十分あります。



だからこそ私たちは、言葉の表面や流行にとらわれることなく、「目の前の児童生徒とどう向き合い、日々の授業をどう具体化していくか」という教育の本質を見据える必要があります。
そこで、この多岐にわたる素案のエッセンスを、現場の学級経営や授業づくりに引き寄せて整理するための私個人の着想(見立て)**として、**「四つの『く』=四輪駆動(四駆)」という捉え方をご提案したいと思います。(※文部科学省が公式に用いている公の用語ではありませんので、その点はご承知おきください。)

■「深く」――「頭の中」を活発に駆動させる学び
一つ目は「主体的・対話的で深い学び」の実装、すなわち「深く」です。 形だけのグループワークや見た目の活動性ではなく、こどもの頭の中で知識同士が手繰り寄せられ、豊かな概念としての「統合的な理解」へと至る深まりを目指します。読む・聞くといった「内化」と、書く・創る・話すといった「外化」を往還し、自らの言葉で意味を再構築していく授業へと高めていく視点です。

■「広く」――多様性を温かく包摂する教室
二つ目は多様性の包摂(公正性の確保)、すなわち「広く」です。 不登校、発達障害や多様な認知特性、外国にルーツを持つこども、あるいは特定分野に特異な才能を示すこどもなど、教室の多様性は増しています。素案では、全員で学ぶ通常枠(1階部分)の柔軟化と、個別に応じた特別の教育課程(2階部分)の拡充が示されました。誰一人取り残さず「広く」包摂し、一人一人の「好き」や「得意」を原動力とした「マイ探究」などの学びを温かく支える視点です。

■「薄く」――余白が生み出す質の高い教育
三つ目は実現可能性の確保と余白の創出、すなわち「薄く」です。 画面全体を分厚い絵の具で隙間なく塗りたくるのではなく、ポイントを押さえて簡潔に描き、豊かな余白を残す「水墨画」をイメージしてみてください。内容の精選や調整授業時数制度の活用によって生み出される「薄さ(余白)」こそが、こどもの自律的な学びの時間だけでなく、教師自身が教材研究や授業改善にあてる「研究・研修等枠」としての時間・精神的ゆとりを生み出します。詰め込みからの脱却と質的転換を図る視点です。

■「速く」――情報活用能力を基盤とした探究の推進
四つ目は情報活用能力の抜本的向上と探究の充実、すなわち「速く」です。 AI 時代において、情報活用能力は思考を駆動させる「言語能力」と並ぶ基盤です。デジタル技術の「活用・適切な取扱い・特性の理解」を一体的に育むことで、自ら設定した問いに向かって情報を収集・精選し、表現・アウトプットするスピードと質が飛躍的に高まります。変化の激しい時代に素早く適応し、可能性を広げていく視点です。

「深く」「広く」「薄く」「速く」。国から示された素案の背後にある膨大なメッセージも、この四つの「く」に引き寄せて捉えることで、日々の学級経営や授業づくりの方向性が整理できるように考えます。タイヤが連動してしっかり地を捉え回り始めたとき、学級の学びはどのような時代の変化(悪路)であっても、力強く前進していくことでしょう。
国が示す大きな方針や言葉を、目の前の一人一人の児童生徒の顔に重ね合わせながら、いかにシンプルで豊かな実践へと着地させていくか。この四つの視点をひとつの道しるべとしながら、皆さんと共に新しい時代の教育・授業づくりを進めていきたいと思います。 (ま)





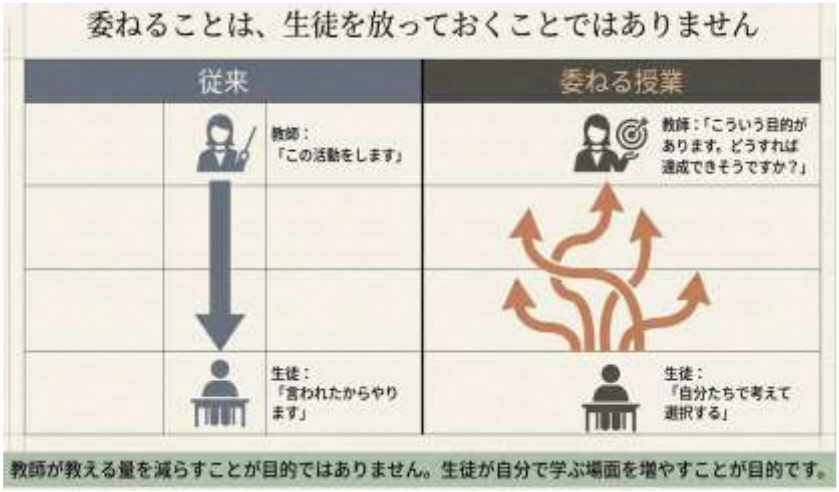
どこまで生徒に委ねられますか？　～生徒の力を信じる英語授業へ～

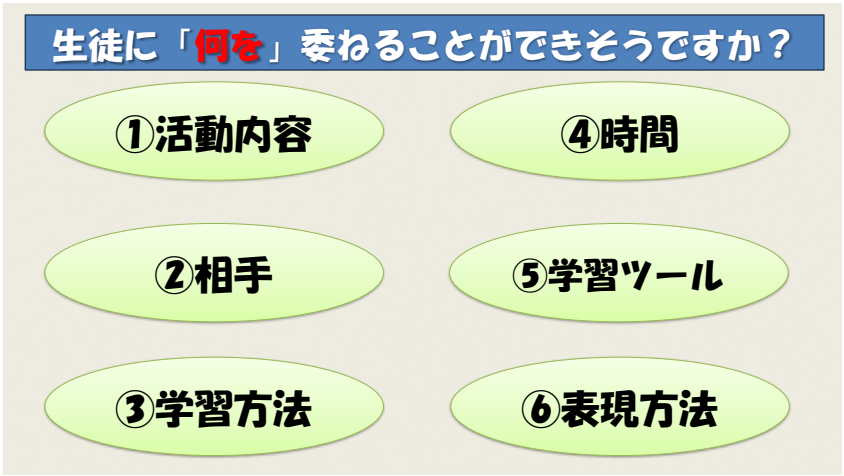
講師　鎌田雅俊氏　見附中学校　教科教育専門監・英語

本研修の核となるテーマは、従来の「教師が主導・先回りして教え込む授業者中心の授業」から脱却し、生徒の主体性や自己決定を重視した「生徒に学びを『委ねる』授業スタイル」への転換です。

研修の冒頭、全国的な動向や全国英語ワークショップでの提言が紹介されました。そこでは50分間の授業時間において、知識・技能の指導や課題の全体共有といった「教師がしっかり指導する時間」を確保しつつ、例えば20分程度の一定時間を「生徒に委ねる（オープンな言語活動）」時間として設定する指導計画の重要性が示されました。

鎌田氏は、**「委ねるということは決して生徒を放任・放置することではありません。教師があらかじめ決められた一律の手順や正解を押し付けるのではなく、生徒が自らの目的や学習状況に合わせて自発的に選択・調整できる場面を作り出すことが「委ねる指導」の本質です」**と説明されました。そして、具体的に生徒へ委ねる要素（ポイント）として、右下の6つの視点が挙げられました。





授業実践の紹介では、ポスターの読み取り活動やAIを活用した英文要約、状況に応じた対話の意訳活動などが共有されました。実際の教室の写真を用いた説明では、生徒が一人で没頭したり、ペアや小グループで教え合ったり、自発的に英訳アプリを活用したりと、多様な形態で意欲的に学ぶ様子が具体的な授業風景の画像を通じて示されました。また、授業の状況や生徒の疲労度・学年段階に応じて、委ねる割合を10%～90%の間で柔軟に変化させることが大切である点も強調されました。

さらに、指導上の重要なアプローチとして「活動が先、指導は後」という原則が示されました。教師が先回りして説明・指示をしすぎるのではなく、まず生徒に活動させて「困り感」や「学びの必要感」を生み出し、そのタイミングで教師が支援を行うサイクルが効果的であると説明されました。



研修中には参加者同士の協議・ワークショップも行われ、教科書のページをもとに「この場面なら何を委ねられるか」を議論しました。小・中学校での実態の違いや AI の活用方法についての意見交換がなされ、参加者自身が自校の授業での取り入れ方を深める機会となりました。



最後に講師から、生徒に委ねることは教師の手抜きではなく「生徒の可能性を信じて教師の役割を変えること」であり、明日からの授業でまずは一つだけでも委ねる場面を作ってみてほしいという強いメッセージが伝えられ、研修会は締めくくられました。



感想

小中学校の教員等 8 名からご参加いただきました。

研修後のアンケートでは、「学びを委ねることの価値」や「今後の授業改善に向けた意欲」が多く寄せられました。

具体的には、内容・相手・方法・時間・ツール・表現方法という「6 つの委ねるポイント」が明確になったことで、自身の授業を振り返り、具体的にどこを委ねるべきか構成を考えられるようになったという声が挙がりました。また、生徒が自ら意思決定して行動し、課題を乗り越えるプロセスが「自己決定感」や「自信」につながるという気付きが得られています。



一方で、英語が得意でない生徒への先回りした指導への反省や、安易な AI 依存を防ぎ紙の辞書とのバランスをとる重要性、委ねる前提としての基本指導の必要性を実感する意見も見られました。総じて、生徒の可能性を信じ、不安がありつつも明日から「委ねる場面」を意識して授業づくりに取り組みたいという前向きな感想でまとめられています。



成果と今後の展望

英語授業において「学びを委ねる」具体的指導法が共有され、教員が課題やツールなどの 6 つの観点から授業改善を図る意識が高まりました。児童生徒の自己決定を促すことで、主体的・意欲的に学ぶ姿や、小中学校間の実態に応じた指導のあり方を確認できました。

今後は各学校で委ねる場面と提示する場面のメリハリを意識した単元構想の推進、小中のスムーズな接続や AI・辞書の適切な活用を通じ、生徒の可能性を信じた授業実践を市全体で共有していきます。







4年「式と計算」公開授業とミニ講話

講師　荒井琢郎氏（新潟大学附属長岡小学校）

葛巻小学校４年教室での講師(荒井琢郎氏)による「飛び込み」授業公開と、放課後にミニ講話を実施しました。

授業

【問題】バドミントンのラケットとシャトルを１つずつ買ったら、合計で1000円でした。ラケットの値段は、シャトルよりも900円高いです。　では、シャトルの値段はいくらでしょう？

1. 最初の「直感の罠」と納得(展開・T1)

安易に考えると「1000円 - 900円 ＝ 100円」だから、シャトルは「100円」だと思ってしまいがちです。実際、こどもたちからも「100円！」という声があがります。でも、計算して確かめてみると…？ シャトルが100円だとすると、ラケットは「900円高い」ので 100 ＋ 900 ＝ 1000円 になり、合計が1000円を超えてしまいます。「あれ？ おかしいぞ！」という気付き(盛り上がり)が、グラデーションをもって教室に広がりました。

2. □と(カッコ)を使った立式(T2)

「本当はいくらなのか？」を確かめるために、分からないシャトルの値段を□と置いて関係を式に表します。

- シャトルの値段 ＝ □円
- ラケットの値段 ＝ (□＋900)円(※シャトルより900円高い)
- 全体の式: □＋(□＋900)=1000

□に色々な数を入れて試していくと… シャトルが「50円」のとき、ラケットは 50 ＋ 900 ＝ 950円 となり、合計が 50 ＋ 950 ＝ 1000円 でピッタリ！ 無事に「シャトルは50円」という正解を見つけ出しました。





3. 条件を変えてチャレンジ！(応用・T3)

シャトルが50円と分かった後、荒井先生は「差額(〇〇円高い)」の数字を変えた発展問題を出題しました。差額の条件が変わっても同じ式の構造を活用し、数を調整しながら粘り強く解決する姿が見られました。単なる計算にとどまらず、言葉や絵図、式で問題の数量関係を読み解き、正解にたどり着く達成感と数学的な見方・考え方を体感できる活気あふれる授業でした。

第２問:「720円高い」場合　第３問:「132円高い」場合(中々難しい端数の問題)

〇 「間違えやすい問題」だからこそ「シャトルは本当はいくらなのか」という問いが生まれ、主体的な学びにつながりました。問いが、「どうして？」「正解を知りたい！」というこどもたちの探究心を一気に引き出しました。
〇 最初から解き方を教えるのではなく、□に色々な数(200円、140円など)を入れてみて「あ、大きすぎた」「もう少し小さくしよう」と自分で調整しながら解決する「試行錯誤(調整)」を楽しむ姿が育まれていました。
〇単に計算順序を変える記号としてではなく、「ラケットの値段(シャトル＋900円)」というひとまとまりの数量を表すための(　かっこ　)が自然に使われて、(　かっこ　)の意味を実感できていました。

講話

算数科の「導入から展開」に焦点を当て、こどもが主体的に課題に向かい、対話を通した深い学びに導くための実践的な手立てが示されました。



1. 導入の工夫:認知葛藤を生む「え？」の仕掛け

こどもが自ら動き出す授業の第一歩は、導入における「違和感」や「揺さぶり」です。既習問題から条件を一つだけ変えて直感とのズレを生ませる（前時とのずれ）手立てや、「〇円なのか、●円なのか？」といった二項対立の問いを投げかけることで、こどもたちの中に「なぜ？」「調べてみたい」という切実な問いを引き出すアプローチが紹介されました。

2. 展開の工夫:問いの焦点化と「逆算」の授業構想

こどもから生まれた「え？」という疑問を、学級全体で追究する課題（◎）へと集約・焦点化させる重要性が語られました。さらに、何を・どう考えればよいのかを見通すために「数学的な見方・考え方」を視点として与えることや、こどもが意欲的に調べたくなるゴールの姿（◎）から逆算して、本時の問題や発問をデザインする授業構想の手法が具体的に共有されました。 そして、多様な表現で確認・確定を重ねることで、難解な概念も全員の「納得」へつなげることの大切さも示されました。

3. 対話を生む土壌づくり:間違いを歓迎する教室文化

対話的な学びを成立させる基盤には、学級における「心理的安全性」と「土壌づくり」が不可欠です。間違いを「問いの始まり」と肯定的に捉え、新たな問いのきっかけとする教室文化を育むこと、そして「だって（根拠）」「だったら（発展・応用）」といった根拠や他者意識を意識した「学びのことば」を日常的に紡いでいく指導の大切さが強調されました。 頻繁なペア対話や日頃の価値づけ（ドキュメンテーション）を通して、安心して学び合える学級経営を基盤としていくことの価値を示されました。

感想

会場校である葛巻小学校を中心に 15 名の参加がありました。実際の授業公開と講話を通して、参会者一人ひとりが明日からの実践につながる大きな手応えと深い学びを得ることができました。

- ○ こどもの**素朴な疑問やつぶやきを丁寧に拾い上げ、価値づける**指導の重要性を再確認しました。
- ○ 難解に思える課題であっても、**視覚的・言語的なプロセスを丁寧に**通すことで、全員の深い学びにつなげる授業構成への納得感が広がりました。
- ○ こどもの考えをまずしっかりと受け止め、**できるようになるまで一緒に伴走する姿勢**の大切さを感じました。
- ○ **教師の目線、声掛け、立ち位置**が絶妙で、こどもたちが最後まで集中して楽しそうに考え続けていました。
- ○ 運動会明けの 6 時間目や飛び込みの授業といった環境の中でも、**学級の温かな土壌づくりや教師の関わり方**がこどもたちの意欲を引き出すことを実感する機会となりました。







成果と今後の展望

算数科における「違和感を生む導入」や「問いの焦点化」など、こどもの主体性を引き出す具体的な授業づくりの視点を共有できました。また、間違いを尊重する心理的安全性や対話の土壌づくりの重要性を学んだことは大きな成果です。本研修の学びを各校の授業実践へ還元し、単元構想や日常の学級経営と一体となった授業改善を推進します。対話を通して自ら学びを深める見附のこどもの育成を目指します。

10月 科学教育部




ネーブルみつけのハロウィンツリー
（当センター久保田事務員作）

【11～12月の研修案内】

現在の参加希望者↓

1	単元別研修会 「溶解の探究」	11月27日(金) 15:40～16:40	溶解に関する実習を行います。粒子の考え方や結晶について考えます。「実習で使用したグッズ」をお持ち帰りいただけます。	参加者 3名

※研修会の申込については終了していますが、開催予定の研修会に、新たに参加を希望する方は、見附市教育センター科学教育部まで電話またはメールでお申し込みください。歓迎いたします。



【見附市児童生徒夏休み作品展　～ありがとう、きらめく夏の思い出～】

９月２６日（土）～２７日（日）の２日間、「まちの駅 ネーブルみつけ」にて、見附市児童生徒夏休み作品展を開催しました。会場には、児童生徒による自由研究や工作など、工夫に富んだ202作品が並びました。「見附市児童生徒夏休み作品展」は今年度が最後となります。来年度以降は、科学研究に取り組む児童生徒が増えて、科学研究発表会がより一層充実することを期待しています。



【見附市児童生徒科学研究発表会】

１０月１日（木）に中央公民館で第62回見附市児童生徒科学研究発表会を開催しました。今年度は36研究が集まりました。児童生徒たちは、日常生活の中から疑問を見つけ出したり、昨年度の研究を改善したりして、夏休みに科学研究に取り組み、その研究を堂々と発表してくれました。ご家族や先生方のサポートのおかげで毎年実施できていることに心より感謝申し上げます。



科 学 の 公 園

研修会の様子　～10/9(金)　磁界の探究～

先日、「磁界」をテーマにした研修会を行いました。中学校の先生がモーターの製作や電磁誘導などの磁界に関する課題に取り組みました。参加者からは、

◎小学校と中学校の系統性が分かった。

◎手軽に使える教材で、生徒は成功体験も感じることができそう！

といった感想が寄せられました。今回の研修会では、参加者も生徒の気持ちになって夢中で課題に取り組んでいる様子が印象的でした。



ブンブンゴマ発電



ブンブンゴマでLEDが点灯する様子

だ液のはたらきの探究課題～新薬の性能調査～

先日、「中教研1年次公開授業」として、中学校2年生「だ液のはたらき」の学習内容で授業公開を行いました。生徒たちは新薬開発の研究員になり、「新薬の特徴や性能を調べよう」という課題に取り組みました。生徒たちは自分が考えた条件で探究活動を行い、でんぷんを分解する新薬の特徴についてまとめました。その際、麦芽糖の生成度を数値で表すため、ベネジクト液の色比表を使いました。興味がある方は当センターまでお問い合わせください。



↑ベネジクト液の色比表

TeaRoom 内の「理センコミュニティ」をご活用ください！

<理センコミュニティの参加方法>

①新潟県立教育センターの HP などから TeaRoom にログインする。

②一番上の「コミュニティ」から、「理セン　授業･教材　　アイディア集」を検索する。

③「コミュニティに参加」を押す。

④トピック一覧から資料を探す。

